No.126
公民館だより
平成18年３月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

団塊の世代

由良地区公民館長　飯澤登志朗

団塊世代の夫婦に定年後に対する意識調査結果が新聞に出ていました。

夫はまず「趣味を持つ」52・1％、次に「夫婦で一緒に楽しもう」が47・4％と続きます。

一方これに対して妻は「家事の協力」41％がトップ、「夫婦が一緒に」は33％と夫よりかなり低い。団塊の世代といわれる年代（一九四七年生れ）が会社生活を卒業して第二の人生をスタートするのは目の前に迫っていますが、好むと好まざるには関係なく働き人間として競争社会を乗り切ってきた人達は、さらりと人の懐に入ることが苦手と云われています。

自分たちが頑張って日本を支えてきたと自負される人も多いと思いますが、気が付いた時には社会は大きく変化し、自分だけが取り残されたと挫折感を抱く人がかなりあるのではないかと思います。

由良地区にも色々なサークルがあります。趣味、スポーツ、食生活等々、小学校体育館や由良の里センターを利用されるグループはいづれも女性が中心で男性は「メシ」、「新聞」と単語を並べるか、「オレは男だ」とメンツばかり重じているようです。

先に公民館が開催した自治学級では多くの意見がありましたが由良地区の環境整備の遅れは否めません。

例えば、無医地区について、下水道について、生活道路整備について、高速通信網（光ファイバー等）宮津市内はもち論、対岸の神崎地区に比べてもかなりの差が分かります。

地域の高齢化が進み、老々介護や独居老人が多くなり福祉についても不安が残ります。

若い人たちが定住して子供たちの明るい元気な姿が一杯に溢れる故郷はもう来ないのでしょうか。

宮津市行政改革大綱（中間案）が示されました。

今後５年間で約60億円の財源不足が生じるものと見込まれる為、再建計画を策定し市民に協力を求めるものです。

住民税や介護保険料等が見直され各家庭の負担が増えます。（くわしくは市役所にお尋ねください）

今、國や地方行政は「自助自立」を国民に求め、各種補助等の見直しを実施にむけて検討されていますが無駄のない効率的な行政を望みたいと思います。

先に医療問題について触れましたが宮津市でも由良地区の医療について考慮はされていますがはっきりとした見込みは立っていません。

「健康的な65歳」とか「活動的な85歳」といわれています。

医療費高騰や介護費用等福祉関係予算の支出を抑制する為に出てきた言葉だと思いますが、だれでも健康で長命を願わずにはいられません。

自然に恵まれた由良に活力を与え、若者が帰ってくる環境づくりが必要ですが団塊の世代のまだまだ元気な力は必要ですし、今後に期待して止みません。

行事報告

主事　磯田充亮

◎十一月三日(木)文化の日 文化祭

今年も例年通り由良婦人会と協賛で開催しました。

作品は幼稚園児から高齢者まで幅広い出展があり盛会でした。

ご協力いただきました由良婦人会を始め関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

出展数（出展者数）

習字(書道含む)	105点	(87人)
絵画	39点	(39人)
ポスター	28点	(23人)
写真	21点	(10人)
ちぎり絵	15点	(7人)
生花	21点	(21人)
染物	22点	(11人)
工作小物	25点	(23人)
その他	14点	(14人)

◎十一月九日(水)十一月十三日(日) 満喫ウォーク

昨年中止した満喫ウォークを宮津美しさ探検隊の協力を得て開催しました。

読書の秋にふさわしい「山椒大夫の物語を歩く」をテーマに「由良の歴史をさぐる会」発行の資料を元に散策しました。

行程は由良の里センターを出発し脇の「汐汲浜」から石浦の「安寿の里もみじ公園」までの約7.5キロのコースで行いました。

途中、山椒大夫ゆかりの石碑等を見学し、両日とも如意寺で谷口和尚の出迎えを受け、祭られている身代り地蔵のご開帳と説明を受けました。

第一回目に読売新聞記者の取材を受け翌日の朝刊（地方版）に掲載され、第二回目その記事を見た亀岡市・京丹後市・舞鶴市など遠方の方の参加があり、両日で最高齢86歳の方を含め65名の参加がありました。

終点では地元サークルの手作りお菓子によるもてなしを受け、深まりゆく秋の由良路を満喫し解散しました。

◎十一月二六日(土) 卓球教室開催

生涯スポーツの普及と健康づくりの推進の一環として卓球教室を始めました。

第一回から初心者や親子づれ等参加があり賑わっています。

毎日、第二第四土曜日

午後一時～午後四時

由良の里センターで開催

お誘い合わせ参加して下さい。

◎十二月四日(日) 第23回宮津市民卓球大会

過去の由良チームは優秀な成績を残しています。今回も個人戦で輝かしい成績でした。

選手の皆様ご苦労様でした。

個人戦成績

女子A級優勝　日比道栄さん

男子C級優勝　熊田良雄さん

男子C級準優勝　中西一義さん

◎十二月二三日(金)天皇誕生日 「子供のびのび体験教室」 子供料理教室

子供会連絡協議会と共催で開催しました。

今年は食改（宮津市食生活改善推進委員協議会）の講師の指導を受けクリスマスケーキ作りをしました。

小学生27名(男9名・女22名)保育園児1名（女）の参加で始めました。

皆んな初めてで試行錯誤しながら出来たケーキは、市販ケーキに負けない出来映えでした。

子供たちの感想文では「おいしかった」。「もう一度作りたい」。と素直に表現したなかに、講師

の方々に対する感謝の気持ちを書いたものが含まれていました。

◎一月二九日(日) 四部対抗囲碁大会

今年は囲碁愛好家が減少するなか、子供囲碁クラブから小学四年生の枡田佳大君の参加があり、一七名で開催しました。

以下結果を報告します。

団体戦　個人戦

優勝　一部　佐原善弘
準優勝　三部　熊田良雄
三位　二部　西之上熊吉
四位　四部　（敬称略）

◎二月五日(日) 自治学級

由良自治連合会長足立明氏及び宮津市議会議員大森秀朗氏を講師に、由良の現状について考える自治学級を開催しました。

足立自治連合会長から

一、由良川河口付近の護岸工事について
二、ＪＡ跡地利用について
三、道路側溝工事について
四、ＫＴＲ丹後由良駅の無人化について
五、由良の里センターの管理運営の変更について
六、市等への要望について

大森市会議員から

一、市の財政再建について
二、ＪＡ跡地利用と医師の確保について
三、下水道問題について
四、ゴミの有料化について
五、その他市議会報告

以上細部に亘り報告があり、その後質疑応答に入りました。

特に医療問題、下水道、高速通信網（光通信等）について地区民が一致団結して難問を解決し由良の活性化を図り、良好な住環境をめざすことを確認し自治学級を終えました。

離島を旅して

由良小学校長　倉野英明

二月十日、宮津会館において夏川りみのコンサートがあった。「涙そうそう」の歌が大ヒットし、ＮＨＫの紅白歌合戦に四年連続この歌を唄うといった現代の国民的愛唱歌を生で聴きたいと思い、出かけて行った。幕が開くと、舞台には、わが家へようこそといった室内をイメージしたセットがされており、大きな窓からは海が見えるという設定であった。

あの澄み渡るような高音の歌声と、郷愁をそそる三線少し憂いを含んだ弦の調べに、夏川りみの生まれ故郷、沖縄県の石垣島の風景を思い浮かべながら目を閉じて聞き惚れていた。

というのは、年末休暇を利用して親子三人で八重山諸島の島々を旅してきたのである。（石垣島、由布島、西表島、竹富島、宮古島）大阪から飛行機で沖縄の那覇空港に、そこで乗り換えて石垣島までは、五〇分ぐらいで着いた。降り立つと十二月だというのに、生暖かい空気が漂っており、すぐさま上着を脱ぎ、薄いポロシャツになっても寒さを感じない暖かさに、さすがここは南の島、沖縄本島に行くより台湾に行く方がよほど近い距離にあり、日本の南の果てに来た実感が湧いてきた。

初めに行った八重山民族園では三線に合わせて三板のたたき方や踊りを教えてもらった。生活の中に自然に歌や踊りが入ってきている沖縄の人々の暮らしに心の豊かささえ感じた。

その日は、八重山の自然を見学したり、純白の砂浜と紺碧の

海のすばらしいコントラストを見せる風光明媚な川平湾からグラスボートで珊瑚やそこに生息するカクレクマノミ等の魚類を船底から観察したりして過ごした。

次の日は、石垣島から高速船でイリオモテヤマネコを始め貴重な野生生物が生息する西表島へ。港からバスの乗り換え仲間川の船着き場に行き、底の浅い屋根付きボートで上流めざし出発した。すぐさま景色は、マングローブの生い茂る林と変わった。（マングローブとは、特定に木の名称を指すのではなく海水と淡水が混じり合う汽水域に育つ植物の総称）川岸に繁茂するのはほとんどすべてヤエヤマヒルギであった。水深は浅く、ボートは少しでも深い所を探しながら進むため、下ってくる船と交差するときなどは、どちらかが横にそれて待たなければならなかった。山の中腹にはヤエヤマ椰子の群落が点在しており、亜熱帯の心地よい風を受け、川面に移るマングローブの景色を眺めていると、まもなく終着点に着いた。船を下り、林の中を歩いていくと、日本最大のサキシマスオウノキが悠然と立っていた。しばし木をバックに写真を撮ったり、周りを散策した後、船は船着き場へと引き返した。次に向かったのは、由布島である。西表から由布島は、百数十メートルぐらいしか離れてなく、遠浅の海は満潮時でも一メートルぐらいである。歩くより遅い水牛車にのんびり揺られながら、ガイドのおじいさんの三線と島唄を聞いていると、何とものどかなほのぼのとした気分に満たされた時間であった。

由布島で昼食をとり、亜熱帯植物園を見学した後、次の目的地、竹富島へと船で移動した。八重山諸島の島々は、どの島も珊瑚礁が隆起してできた島である。この島は星砂で有名な島で、バスから砂浜に降り立つと、多くの人たちが下を向いて一心に星砂を探していた。

次は、水牛車に乗って島の町並み見学である。ここでも黒い大きな水牛がのっそりのっそりと一歩一歩珊瑚の道を踏みしめながら私たちを別空間へ案内してくれる。道路は水牛車がやっと通れるぐらいの幅である。珊瑚の塊を積み重ねた石垣に囲まれた平屋の赤瓦の家並みを水牛車に揺られながら眺めていた。乗り物が高いため、石垣を越して家の中までよく見える。どの家も、敷地はそんなに広くなく、造りも家財道具も豪華ではなく、質素そのものであった。途中、車から降りて珊瑚の粒をひきつめた白い道を歩いていると、周りの空間も時間もゆるやかに流れており、進む速さが違うのではないかといった錯覚に襲われてきた。

世の中は、「お金さえあれば何でもできる」といった拝金主義が横行し、都会では、やれ勝組、負け組だとか、ミニバブルの様相を見せ始めているらしいが、ここでは、そのような生活とは全く無縁ですといいたげにブーゲンビリア等の色とりどりの草花が咲き乱れ、青く澄んだ空。そして、白い珊瑚の道。一歩家に入れば、〝オーリ　トーリ〟（いらっしゃいませ）と、言った言葉が返ってきそうな風景の中に身を任せ、ぼんやりと「しあわせ」とは何かを考えていた。

宮古島で出会った岡山市出身のバスガイドの娘さんは、宮古島が気に入って、もう岡山へは帰る気がないと行っていた。わかるような気がした。時間がゆっくりと流れる沖縄の離島、豊かさとは何かと考えさせられる今回の旅であった。

里センターでのクリスマスケーキ作り

六年　山田梨花

十二月二十三日、この日私は、里センターでクリスマスケーキ作りをしました。

スポンジは、あらかじめ作られていたものです。

私は、クリームを泡立ててスポンジ全体にクリームをぬりつけていきました。

トッピングには、カラフルなチョコスプレーをかけてジャムを乗せ、チョコペンでチョコをたらして、最後にイチゴをかざり付けて、できあがりです。

時間があったので私は、友達と遊んでいました。

たっ球をしていました。

ダブルスでしていました。

でも、相手チームのしかけてきた球は、とても速くてなかなか思うように行きませんでした。

でも、すごく楽しかったです。

昼に、自分で作ったケーキを食べました。

おばちゃん達が作ったスープとピラフも食べました。

私は、この経験をいかして、今度はスポンジ作りにも挑戦してみたいです。

そして、いろいろなバリエーションのケーキをたくさん作っていきたいです。

楽しかったケーキ作り

五年　北野雅基

十二月二十三日里センターでケーキ作りがありました。ぼくが、里センターに行くのに外へ出たら、すごいふぶきで前が見にくかったです。お母さんが学校へ行く用事があったので、里センターまでおくってもらいました。

まず入ったら、六年や四年がいました。へやにジャンパーとかをおいて、しばらくまっていました。そして、ケーキ作りの用意ができて、あいさつをしてもらってから、六年が決めたはんに分かれました。ぼくのはんは、四年のりょう君とももちゃんと五年のりょう君とあんなちゃんでした。そしてケーキ作りが始まりました。どうきじを作るのかと思っていたら、きじにデコレーションをするものでした。

最初はクリームをねって、それからいちごジャムとかいちごをのせてかんせいしました。

その後卓球がしたい人は、二かいに行きなといわれて、二かいに行って卓球をしました。それから、なぜか予定になかったけど、昼ごはんを作ってもらっていて、それを食べました。その後、いよいよ作ったケーキを食べました。とてもおいしかったです。最後に感想を書いて帰りました。

故郷は遠きにありて思うもの

小室知彦

このくだりで始まる室生犀星の詩は故郷というものをあまりよいものに謳っていませんが、私は故郷を「とてもすばらしい心の糧」として生活をしています。由良に生まれ育った一人の由良人として、故郷を思う心を少し書かせていただきたいと思います。

私は昭和三十二年、由良の浜野路生まれです。現在は東京の会社に勤務しておりますが、盆正月には由良の浜の風光明媚な空気に触れるために楽しみに帰省しております。いま私の家族は名古屋、私は東京単身の二重生活ですが、どこにいても由良を忘れることはありません。由良幼稚園、由良小学校の学友はみんな仲良しで楽しい思い出は尽きませんが、学校の思い出と同時に、自分の中にＤＮＡとして残っているのは「祭りの太鼓」と「剣道」でしょうか。

仕事の関係で全国各地の民族太鼓を見学することがありましたが、由良の太鼓はことのほかすばらしく、そのリズム感と精錬された気品は他のものと比較して秀逸だと感じました。「神楽おどり」「練りこみ」「入拍子」があったと覚えております。中でも「練りこみ」では緩やかな調子から「ターカタン・タカタン、タカタン…」と入拍子に入っていったと思いますが、この「緩から急」に移りゆく「間（ま）」と「品（しな）」はなんとも奥深く、特に小太鼓との微妙な調和が求められたと思います。由良太鼓の響きは感動を呼び、まさに由良の郷土愛の琴線に触れるものがあります。

もう一つは剣道です。小学校の時、体育館で熱心に教えていただいた先生方のご恩は忘れません。そして由良の自治連合会の夏の剣道大会が懐かしい思い出です。私が小学校六年生の八月一日は珍しく雨で、剣道大会の会場が急遽由良神社から（古い）由良小学校の体育館に変更となりました。小学生個人戦・高学年の部に出場しましたが、いつも慣れ親しんだ体育館だったせいか順調に五人ほど勝ち、決勝に進みました。決勝戦では福知山の人に抜き胴で負けてしまったことを覚えています。この小学校の剣道が元で大学に入っても剣道部に入り、会社でも剣道を続けています。「交剣知愛」（剣道の竹刀を交えてよき友を得る）そして「打って反省、打たれて感謝」の気持ちで今でも週末には稽古で汗を流しています。こうした思い出は故郷、由良から頂いた大きな宝のようなもので、東京でも会社の仲間に話しをするたびに「うらやましい故郷を持っておられますね」と言われます。

最近ベストセラーになった藤原正彦著「国家の品格」（新潮社）には、日本人の財産として武士道精神と豊かな情緒、美しい自然、そして日本人の持つ４つの愛「家族愛」「郷土愛」「祖国愛」「人類愛」が書かれています。美しい郷土を持つことを誇りに思い、由良に感謝しながら、今日も満員電車で通勤をしております。

平成十八年二月

憂うより行動に

中西六右衛門

由良村が宮津市に合併した昭和の大合併から五十年が経過し、今平成の大合併で日本中が変動するとき由良地区の現状を考えてみたい。昭和三十一年由良地区を二分した合併騒動は、多くの禍根を残したか当時の当事者を始め地区民も語りたがらずに今日に至っているように思う。私は大学生で由良を離れていたが、帰郷のときに聞いた住民投票とその結果。京都府への陳情。宮津舞鶴との交渉とその駆け引き。地区を二分する中での村会と村長のせめぎ合いの中での村会の決議と村長の一票。結果宮津市へ合併となった後に残った怨念と足かせは、由良地区の発展を常に妨げる結果だけが残ったように思う。一経済人の私は、合併の結果を最大限に活用し企業の発展を図ったが、一般住民にとっては言葉に出せないだけにそのギャップに甘んじなければならなかった苦悩とジレンマが有ったと思う。

今、この合併を考えると、当地は由良川流域の加佐郡の一部であり、人間的にも言語的にも文化経済的にも川筋としての何百年の歴史を有し、政治的には舞鶴田辺藩の一部であり、地勢的に大きな無理を押しての無理合併であった訳である。宮津、岩滝等とは江戸時代北前舟の船頭や水夫としての拘わりはあったが、これは海上輸送の技術集団としての雇用契約関係であり、地区としての関係は薄かったと思う。

この経過を踏まえ、合併後も当地区は経済的に金融機関が舞鶴信用金庫や京都銀行西舞鶴支店の管轄であり、電気は関電西舞鶴管轄、教育では西舞鶴高校学区で残り、就職も舞鶴方面が主体であった。医療も舞鶴との繋がりが強く、娯楽や買い物も舞鶴地区が主体であり、宗教区域も舞鶴川筋地区と継続した。

この状況は地区民が思うより以上に宮津、与謝の住民は意識し、奈具海岸を理由に外様扱いをされ続けたと思う。

合併二十五年を機に、高校学区が宮津になったが、これはそれに伴う経済的利益を取られただけであり、本当に地区として利益があったか考えてみる必要はあろう。この一点を捉えるだけでなく、合併後の当地区の変化を再検証する必要があろう。文化、教育、経済的にどうであったか？地域の環境整備はどれほど整備されたか？道路、下水、電気、通信、交通は他地域と格差は無いか？福祉、医療、過疎老齢化対策はこれで良いのか？

検証が済んだ時、多分余りの格差に愕然とすることであろうが、このまま放置する訳には行かないと思う。将来的に整備改善がなされる保証はあるのかじっくり考えてみたい。

由良周辺部の宮津市、与謝野町、伊根町、舞鶴市を見る時、一市四町の合併に失敗した宮津市は伊根町との合併も拒否され、単独で生きて行かねばならない状況にある。経済的に破綻が目前の宮津市が当地由良を重点的に整備改善する補償は殆んど無く、奈具海岸で隔離され地形的にも連結が無理な由良は、放置せざるを得ない事となる危険性が多分と思える。

先のことを憂うだけでなく、自分の事は自分達が声を上げ行動する以外解決の道が無いことは経済人ならば当然の事であるが、現在の由良地区では誰が声を上げ、誰が組織を作り、誰が先導指導出来るのか、非常に難しい問題である。

集落、村落、地域としての纏まりは合併後は完全に消滅しつつあったが、先年自治会長以外に自治連合会長制度が発足し、やっと心棒となれる制度が出来たが、未だ日も浅くその継続性と行動力を支える地域の盛上がりは出来ていない現状と思える。地区民への現状報告を兼ね、又意識改革の情報提供は継続性の有る公民館が行うのが良いと思う。他地域を見ると、公民館と自治会が先導して、地域の活性化、環境改善、地産地消運動等に取り組み確実に成果を上げている。この近隣先進他地域の視察を行い、当地区なりの実行策を策定することが急務と思う。

他方、由良に隣接する川筋、神崎は、近年急速に環境整備が整い、上下水道完備、通信設備は最新の光通信網が整備、電力は不時の災害にも対処出来、交通も老齢弱者対応策が講じられて来たようである。隣接地が整備される中、由良は行政区が異なるから我慢しろでは納得出来ないと思う。

由良はどうすれば良いのか？半分捨てられそうならば、舞鶴市を視野に入れ併合は可能なのか検討する価値は有るように思えるが。どちらにしても相手が有る事ゆえ、容易な事ではない事は充分理解できるが、全く放置して無策故に捨てられ、耐え忍ぶことは余りにも無残に思える。

賢良なる地区の皆様の御批評と御判断に期待したく思います。宜しく。

川柳

大森　美智子

望郷の沖は霞んでまだ逢えぬ
風紋のささやき古代の声がする
いのち残照想い出ばかり研する

坂本　妙子

会者定離　沈む心に蓋をする
テーマとは　外れた支流に居る安堵
噛み合はぬ　主張へ風が突き刺さる

公教育に携わって

坂下和也

昭和40年に府立宮津高等学校で教壇に立ち、21年間の長きお世話になり、郷土由良を離れて早くも20年が経ちました。こちらでは南陽高校、鳥羽高校、嵯峨野高校、教育委員会、西宇治高校、再び南陽高校、最後に洛北高校と17年間、2、3年おきに転々としました。3年前に退職し、現在は高校の校長会の事務局長としてお世話になってます。38年間高校教育一筋に身を投じて無難に終えられたことに感謝しております。

教師38年間一貫して、公立の学校へしかいけない生徒達に塾・予備校へ行かなくても希望進路実現を保証するべく教育信念を持ち努力してきました。主なところを振り返りますと新設の南陽高校が進路実現で本来理想とする教師と生徒の学校づくりに成功したことや、京都府公立で初めて全日制の単位制を導入し公教育現場に刺激を与えた西宇治高校に携われたことであります。また、日本で最も古い中学校であり名門京一中の伝統を継ぐ洛北高校で校長会長として、2年間全国の高校教育の潮流を直接肌で感じとり、新たに教育観を深めることができました。このことから洛北高校に中高一貫教育を導入していただけることとなりました。今では満足感に浸れる幸せを得られ感謝とともに安堵しています。しかし、その一方で大変残念なことに現在の道徳観に深刻な亀裂を生じた日本社会、とりわけ少年たちの多発する非行や公の場での目にあまる立ち振る舞いなどの現状から責任の一端を感じざるを得ない。戦後60年の日本の教育成果を問うとき無念の思いが強いことです。

親の自己責任の欠如と義務の放棄と言ってしまえば簡単ではあるが、そんな親に教育してきた学校教育にも一因があります。また、権利・自己主張ばかりを大事にし、義務をおろそかにしてきたのも学校教育でした。戦後の誤った民主主義教育観のつけでもある。そして社会が豊かになると同時に教師自ら甘えた権利主張を拡大し労働者教師になりきってしまったことです。残念なことにこれらの主張を唱え、実践してきた彼等がほとんど反省が見られないことです。組織拡大のため相変わらず過ちを続けようとしていることには少々怒りさえ感じております。

それだけに、教師にはしっかりとした日本特性の武士道観を有した教育道を歩んで欲しいと祈念するものである。それだけの教育理念と教育信念を抱き続けて欲しいのです。

青少年の現状打破は根本的には「三つ子の魂百まで」を軸に親が責任をもち家庭教育をしっかりとすることである。親は第三者に、いちゃもんをつけられても跳ね返す位の責任と信念を持ち自信をもった教育を三歳までし続けることだと思う。それを周辺の地域は理解し協力することであり、三歳を超えれば地域住民が善悪等道徳教育を他人でも指摘することであり、それを受け入れる親子を育成することである。あと、学校教育でもその基盤をしっかり固め続ける教師集団が欠かせない。そこに教育道が求められる。児童・生徒とともに教師も成長する教育道を歩み続けることなのです。これからの教育界は規制緩和でこれまでの不可能が可能となるように教育の多様化が予測できますが、それだけにしっかりとした教育道が必要です。中・高

一貫教育だけでなく小・中一貫が幅を効かせる時代はすぐにやってくる現状である。いま教えている子が親となるのである。だから今の子に何を教育しなくてはならないのかを現実社会からしっかりと見抜き対処していきたい。今の社会風潮に流され見間違った多くの親の教育観にも毅然と立ち向かいたい。このことを地域社会にも、マスコミにも理解を強く求めたい。しっかりとした教育道を歩む教師を一人でも多く育成して親とともに日本社会がいい方向へ変革していくことを願い、今の仕事に精を出しています。

追悼

前由良地区公民館長　酒田　治氏は病気療養中のところ、去る10月30日永眠されました。享年75歳でした。

氏は平成６年７月から公民館主事として、また平成10年４月から同13年３月まで館長として温厚な人柄と卓越した手腕を発揮され公民館運営にご尽力されました。

また平成12年度は宮津市公民館連絡協議会会長として、宮津市全域の公民館活動の中心としてご活躍されました。

氏は、港自治会長を始め、民生委員、社寺関係総代等の要職に就任され、常にふれあいを大切に地域活性化に貢献されています。

さわやかな生前の面影が懐かしく、地域とともに生きられた氏のご冥福をお祈りいたします。

（第七回中学生の主張大会）ひかり輝く笑顔

栗田中学校二年　尾崎　華

朝、友達や先生からあいさつと共にこぼれる笑顔、道ですれ違った人と交わす一瞬の笑顔、いつでも、どこからでも見守ってくれる家族の温かい笑顔。私は笑顔が大好きだ。笑顔に出会うと、なぜだかウキウキしてうれしくなる。目尻が下がり、真一文字に結んでいた口も少し開き、そしてごくわずかであってもおだやかな顔になってくる。

反対に、怒っている顔、泣いている顔、悩み苦しんでいる顔などを見た時は、その理由がわからなくても、私まで悲しくなったり、どうすることもできない自分に悔しさや、情けなさを感じたりしてしまう。

日々の生活の中では、いろいろな事がある。今日楽しくても、明日はどうかわからない。朝、つらいことがあってもお弁当の時間には解決していることもある。一日中、一年中、一生、笑顔で過ごせることは、まずないだろう。

実際、今、私は、落ちこんでいる日が多い。はっきりとした理由があるわけではない。自分自身の行動に嫌気がさしたり、全てのことがどうでもよくなってなげやりになったり、友達と比べて劣っている自分に腹立たしさを感じたり…。とにかく、全てを捨てて逃げ出してしまいたいと思うことがある。

そんな私の弱った心や疲れた心に小さな光がとびこんできてくれるときがある。その光は、大きくてたくさんあったり、よ

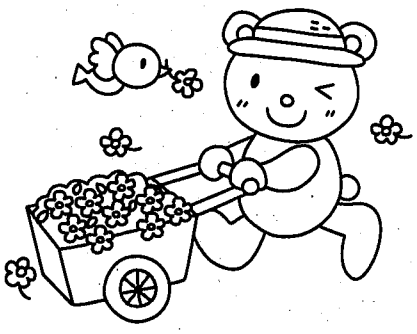
く見ないとわからないくらい小さかったり、ひっそりとたった一つだったりする。しかし、とにかくさわやかで、温かくて、全てを包み込んでくれる光なのだ。それは、〝笑顔〟である。

笑顔といっても作られたものはぎこちない。輝いている光ではなく、ただの線である。かといって、心がやすらぎ、元気を取り戻し、心に響くような笑顔、というと、とても難しく感じてしまう。しかし、それは、相手のその時の状況や気持ちに少しでも近づき、共に分かち合おうとした時、心の底から自然と出てきた〝ほほえみ〟ではないだろうか。

幸せなことに、私は今まで多くの人達の〝ほほえみ〟に救われてきた。言葉がなくても〝大丈夫だよ〟〝応援しているよ〟〝もう少しがんばってみようか〟と温かいまなざしでほほえみかけてくれた人達に、助けられてきた。次は私の心からの笑顔で多くの人に元気になってもらいたいと思う。病んでいる心をほんの少しでも楽に、そして、〝もう少しがんばってみようかな〟と一歩前進する勇気をもってもらいたいと思う。

私はさわやかに輝く笑顔が自然とでてくる人になりたい。そして、いつの日か、たくさんの人に、

「あなたの笑顔っていいね。」と言ってもらえるように…。



『島四国』と〝小豆島の旅〟

濱野路　大森　孝

（一）

私にとって生まれてから二回目となる、平成15年11月10日、錦秋の小豆島の旅は、久しぶりであって、老いて沁み沁み心に刻まれる想い出の多いものであった。回想に満ちた、人生を振り返る濃い内容のものとなった。

バスが「日生」の港で、島へ行くフェリーを待つ間も、曇った空からは今にも冷たい雨が落ちてきそうで、気が滅入りそうであった。秋は天気が変わり易い。こんな曇り空の下で、寒霞渓の紅葉は果たしてどんなだろう。

ふと、自分が最初にこの島を訪れて「土庄」の港にあがった遥か48年昔の西宮市の建石町にあった高等学校の春の遠足の附添いを思い出さざるを得なかった。駆け出しの教員人生の始まりで、何が何やら分からぬ新米教員がそれでも担任の高校生徒40数名を引率して、今にして思えば慌ただしい26才の若輩には、殆ど風景の記憶も定かでない、いわば生徒と首っ引きの遠足旅行でした。ただ僅かに覚えているのは、年配の学年主任（教員）が言った『秋にくるとね、寒霞渓の眺めが素晴らしいのだよ』と傍らで説明してくれていたのと、昭和27年の島の山には猿の群れが住んでいて、私ども小豆島初旅の若者は、何時逢えるかと楽しみにしていたものだ。そうして高校生を引率する教員は2名の西播磨に生活圏をもつ以外は総て阪神間に居住していて、小豆島をかなり識っていたようだ（神戸市より通勤が1名）。

乗った船『フェリーひなせ』は、最上階の操舵室の下、２階に当たる部分が大広間になっていて、船の進路に真正面から向きあっていた。眺望が素晴らしく、180度の進行方向を恣ままにすることが出来て、客室は明るく、客席はソファでゆったりとくつろげた。先に上がった妻が席をとっているので、後を追った私だったが、途中で２階の中程でふと足を止めねばならなかった。

それは１階ステップから揚がって、少し歩いた舷側に近い処に、小さな机を挟んで座っていた数人の高齢の男達だった。

あっこのグループ！それは『日生』の港にバスが停まっている時に散見した旧海軍の略帽を被って見かけた人達なんだ。私たちと同じバスの乗客ではなかった。それがこうして、机を囲んで、座っているんだ。中の一人が小さな軍艦旗（布製）を持って、何やら語りあっている。声高ではないが、一人がボソボソと喋ると他の者も応じている。恐らく現在の身の上話か、健康の話か、一見して、私はこの人達が、太平洋戦争で、持ち場を同じくして、多分死線を彷徨ったか？頒ち難い苦難の戦争体験を余儀なくしてきた仲間なんだと想像できた。同じ釜の飯を食った仲だ。

併せて、私自らも73才過ぎても軍学校の分隊舎303を継続してやるとした東京や千葉の期友の意思に応えて行かねばならぬと思った。海軍兵学校78期の総会は昨年発展的解消をしたが、私どもの303分隊の会は有志の雄図がさかんで、将来も続けると言う。

この老兵の方々は、その後、見学先の寒霞渓で、山頂の土産物屋で、各々が思い思いに地産の名物を購入しておられた。グループのまとまりを敬慕していた私は、寒霞渓の山頂からケーブルカーで終点に降りる迄、この老兵の方々から眼が離れなかった。妻に即される迄、行く先々で、拘泥って、気がそれては仕方がなかった。羨ましいなと仰ぎ見て、私のかかわる海軍の同窓会への反省の条件とした。

さて、一等客室で戻ってから眺める船外の風景であるが、『日生』の港を出て岬を廻ると、右舷側（本土側）には、夏の避暑のための瀟洒な別荘が或いは高く、或いは水際に沿って続いて行く。その佇まいは、曽遊したこの同じ岡山県の『牛窓』の山地の別荘のように、２段、３段と山の上へ伸びている。あっ、瀬戸内は波が静かでいいなぁと、更めて決まりきった感慨におちついた。

左舷側に伸びては続く島影はどこがどこやら確かめている暇がない。次から次へと島が現れ、島が後へ退って行く。ただ次々と浮かぶ漁船を見ていると思うことが一つあった。それはこんな多島海を、浅い海域を避けて、旧海軍の機動部隊がどう通って行っただろうか。瀬戸内を、大阪・神戸へ向かうことが可能だっただろうか。そんな水路はとれなかったのではないか。それ故に西瀬戸内の柱島付近から、豊後水道へ出るに及んだのだな!!と、今回の小豆島『内海港』への旅で、朧気ながら判ってきた。

観光バスは坂道を曲がって、頂上寒霞渓のケーブルカー駅へ向かう。バスが里山へ入ろうとして、路傍左側に所謂霊場のとある寺への参詣の標石があった。『あっ、これは？』この時、私はふと、今を去る66年の昔、喜びいさんで、〃茂八〃のおとわさんに伴われて、この島へ巡礼にやってきた父方の祖母いしの白装束づくめの巡礼姿を思いやった。意気揚々と、祖母は昭和12年の４月朔日、玄関を出立つしたがなぁ、白い手甲に白い脚絆に白づくめのいでたちで、身のまわりのものを小さな布袋につめて……念願の旅に出て、この

霊所へ詣でたのだろうか。…その巡礼を終えて、3ヶ月後の7月30日、優しかった祖母いしは61才で逝った（村の医者のせ氏に診断されて）。

あれこれ想いをめぐらせている中にバスは坂道を曲がりながら樹々の間を縫って行く。11月の秋の終わりの林や木立ちは、見たところ由良の景観と殆ど変わりはない。寒霞渓へ向かう里山近くは、何と〝濱野路〟や〝港〟の開墾へ上る所謂『堂の上』新道の樹立ちの中を通っている感じ、それは濱野路地区の展望台迄続く樹種と薮を交えて、懐かしく身近に感じた。窓外には由良の里山が広がっていたのである。

（三）

星野哲朗氏、私の敬愛する作詞家のかなり早い頃の唄に、『むすめ巡礼』というのがある。これは日活映画『むすめ巡礼流れの花』の主題歌で、私が若い頃きき覚えた歌である。星野氏はきくところでは、防予諸島の大島の屋代島で生まれ育ったという。

唄

一、沖に寄る娘とんとろろ
　空にやのどかな　あげ雲雀
　娘遍路はひとり旅
　ここはどこやら故郷恋し
　シャラリコ　シャラリコ
　シャンシャラリ
　八十八ヶ所　鈴だより

二、親はないのか　母さんは
　問えばうつむく　菅の笠
　娘遍路は　まだ二八
　ひと目逢いたや　母恋し
　シャラリコ　シャラリコ
　シャンシャラリ
　頬にちょっぴり　なみだ汗

三、いつか日暮れた　磯の道
　帰る白帆が見えたとて
　娘遍路は　ただひとり
　帰命頂礼　父恋し
　シャラリコ　シャラリコ
　シャンシャラリ
　赤い夕焼　見て歩く

ところで、故き祖母の年齢を16才も上廻った畢生を幸いにも得て、寒霞渓の時雨を浴び乍ら、祖母は何を思い、何を念じて、『島四国』を巡礼してまわったのかと、沁みじみ想像する。

私事ながら、父方の祖母は両親が早世して、10才代前半に孤児となり、悲運と薄倖の中を16才を待って結婚し、畢生は孤独な魂の闘いであったと考えられる。善く生きぬいたと思う。

初孫であった私にとって、かけがえのない祖母が、歩んだであろう、小豆島を遅ればせ乍ら74才で、妻と両人でやってきた。祖母の念じた霊所での祈りと私が想う内容とはかなり差がついてしまった。生かしてもらって、私が享受しているこの幸せを薄福であり乍ら、健気に生きぬいた先祖に感謝しなければならない。

（平成18年1月14日記）

満喫ウォーク風景

同じ場所に立って
―小説「金閣寺」の舞台―

中西夏江

○どんより曇った空の下の
荒涼たる由良川の河口。
産卵の季節
ボラ
鰡釣
○山椒大夫の屋敷跡
石垣に埃まみれの
芒　秋草など。
その上の邸跡は
夏みかん園と雲州みかん園。
参差たり、ひれふす様。
○河口近く
竹やぶに包まれし州あり、
水田一、二丁歩、
天水で耕す。
「耕や馬さへ蹄(ママ)かぬ山蔭に」
○せまい河口。
○河口の外れ、河口より八里
形ノ冠島あり。(※「形」の上に
島の形をスケッチした図あり。)
天然記念物
大みづなぎ鳥

『由良湊千軒長者』
由良海岸
浸蝕甚しき故
護岸工事
セメント流し込み
冷たい白さ
沖暗く、雲累々たり
その間に冷たい薄い青空のぞけり
白い雲のはし、冷たき羽毛
砂浜よりスリバチ体形に落つる海
砂―花崗岩質
鉛いろの海
沖は納戸いろ
山々はいかめしい黒紫色
うしろ由良ヶ岳
◎四馬力コンクリート・バイブレーター

以上の箇条書きは、三島由紀夫「金閣寺」嘱目（取材ノート）校訂　佐藤秀明―から由良に限ってのみ―の抜粋である。

また別に「金閣寺」創作ノートも残されていて、彼が周到な立案のもと詳細に調査していたことがよくわかる。

小説「金閣寺」本文については、すでに公民館だより(94号～96号）と、宮津瓦版（二〇〇六年元旦)に拙稿記載済みなので、大方の重複を避ける為に、ここでは五十年前（昭和三〇)、三島が書き留めた由良の川や海、山、また生活の一端など、その文学作品の舞台と同じ場所に立って眺めてみたいと思う。

冒頭、箇条書きの
竹やぶに包まれし州あり。
云々……。
この州は城島と呼ばれていた島であり、三島が眺めた竹やぶに吹く川の風は、
参差たり、ひれふす様。
の一行に的確に記されている。

昭和四五年に砂利採取、由良川上流の水害防止―ということで、この城島は削り始められ、その後の事情により現在の形となってしまった。

天水で耕す。
―この簡潔な一文に、自然が産み出していた風致と穏やかにそこを耕していた人達の営みを思い浮かべる。対岸の油江から一頭の牛を伝馬船に乗せて来て、人々は耕作をし、昼弁当を楽しみ、仕事を終えてまた、牛と共に帰って行くのだった。まさに水墨画の世界であった。

由良海岸
浸蝕甚しき故
云々……。
当時、河口より北へ向かって一部には、護岸工事が始められていた。
沖暗く、雲累々たり
十一月の海や空は、こうして〝うらにし〟を呼び、初冬の景を展開して行く。
三島は記している。
○弁当忘れても
傘忘れるな
○十一月→十二月

天気でも畢かや
四、五回時雨来ることあり、
日照雨。

ところで、三島が西舞鶴から徒歩で来てこの由良浜に立ったのは、どの辺りであったろうか。

文中から考えると、多分同志社の建物のある敷地の横側を通って浜におり立ち、河口から渚を歩いて現在のマリーナ・フィジーの下辺りで海を眺めたのではないだろうか。

勿論、現在のような舗装の道路や段々も無い、畑続きのなだらかな広い浜であったから、三島は静かな砂浜に腰を下ろして心行く迄、海を眺め、想念をめぐらして行ったのだろう。

裏日本の荒れた海、ひまなく押し寄せる波また波、暗い沖の空の重い雲の累積、そして黒紫色の岬の山々―。彼の視界に入ってくるものの動と凝結―。

やがて三島を包む巨きな力が強い想念となって『金閣を焼かねばならぬ』と、小説の主人公に決意をさせるのである。実際に暗い巨きな海と空―を眺めていると、何物かの力に包みこまれていくような感じがしてくる。

三島は、ひとり由良駅前通りを歩いた。きっと桜紅葉が散り敷いた道であっただろう。そして「日の出旅館」をたずね、宿帳には無記名のまま二泊し、三日間の逗留を終えて由良駅を発ち京都へ帰って行く。

「金閣寺」第八章の〝日の出旅館〟に次の様な記述がある。

―菊のすがれている素朴な小庭がある。高いところにしつらえた水槽がある。夏のあいだ水泳からかえった客が、体についた砂を洗いおとすためのシャワーがその水槽から下っている。

当時の由良には上水道はなく、各戸、汲み上げポンプによる生活を余儀なくされていた。因みに水道給水が始まったのは、昭和四七年（一九七二）である。

三島由紀夫の作品は、世界三十数カ国語に翻訳され、愛読されるなど、もはや二十世紀文学の古典であるという。小説「金閣寺」は外国でも読まれていて、小説の一舞台となったこの由良は作品の中で生き続けて行く。

存在するということは素晴らしい。三島が仰いだ由良ヶ嶽に霧は立ちのぼり、春夏秋冬の月は照る。古来、山は信仰の対象であった。人々は山に畏敬の精神をもって生きて来た。三島が由良ヶ嶽を「眺めて」とせずに、「仰いで」と記した精神の深遠さを思う。

やがて春山には、登山者の声が谺する。登り楽しむことの出来る健全で幸せの山に、私達は畏敬の念をもっているだろうか。

繰り返していうが前述の城島は、由良川に一つの美景を添えていた。今、その景は皆無である。切断され、僅かに残った小島には、三島が記した竹藪は跡形も無い。レジャーの一基点となって、カラーの簡易な小型建造物が点在している。

私達の生活する条件が変わってくることは止むを得ず、より順応しようとすることは当然ながら、流れゆく月日の中に由良に残された風物や文学の香りを未来へ―と切望して止まない。

たくさんの想い出が詰まった私達の由良浜に、ひたむきな情熱の激しさをもった三十歳の壮き三島由紀夫が、いくらかの憂愁をたたえながら直写した「金閣寺」第七章後半、第八章前半だけでも読んでくださることをお勧めしたい―と思ったりする。

二月の砂浜は驚くばかりに狭い。それでも、夏に大型の花序を直立する弘法麦は今、砂の中で春を待っている。薄花色の沖から吹いてくる風は透明で、三島の作品世界の遠景を想わせる。

二〇〇六・二・一五記

※参考資料　新潮十一月臨時増刊　平成十二年十一月一日発行

丹波丹後地方の鉄道敷設の歴史（その二）

四方寿朗

⑥宮津線と北丹鉄道

宮津線の舞鶴―由良間の路線は、福知山から河守に達する北丹鉄道との連絡にからんで幾度も計画路線が変更された。最初は西舞鶴港の海岸沿いに下福井を通り、由良川に出る計画だったが、煙を嫌う市街地の住民の反対で実現しなかった。次に現在の高野から城屋を経て真壁峠を越え、久田美で由良川を渡り左岸の志高で北丹鉄道に連絡し、由良川沿いに平地を河口の由良まで下がる予定だった。

この計画はかなり進んで志高の駅の位置も決定していた。ところがこれも丸八江村（現舞鶴市丸田東）住民の耕地を奪われるとの反対運動で中止となった。そして現在の高野から四所を経て東雲、上東に出る路線に変更された。

しかし国鉄はまだ北丹鉄道との連絡を諦めず、上東で由良川を渡り丸田東から国道沿いに由良に達する路線を考えていた。ところがこの計画も丸田地区の強い反対で、現在の由良川右岸を河口まで下がり、神崎―由良間に橋を架けることになり、宮津線と北丹鉄道との連絡は遂に実現しなかった。

国鉄が久田美―志高や上東―丸田で由良川を渡る路線に執着したのは、河口の由良―神崎に比べて川幅が半分以下で、しかも日本海の荒波の影響も少なく工事がやりやすいという理由もあった。また、久田美、志高などの上流では由良川洪水がひどくなるとの反対意見も強かった。

宮津線が若し久田美―志高か上東―丸田あたりで由良川を渡っていたら、現在の宮福線は由良福線となり、河守から由良までの由良川左岸の村々は格段の発展を遂げていたかも知れない。今年福知山市と合併した大江町も路線連絡の要としてもっと発展していたに違いない。先輩の決断がその子孫の将来の運命につながる身近な教訓である。

昭和四十年代を迎え自動車の発達により、交通手段としての存在価値は無くなり、昭和四十六年北丹鉄道は半世紀に近い歴史を閉じた。これにより国鉄新線宮守線の建設と、これを福知山まで延長して宮福線とする計画が決定的となった。

⑦加悦鉄道

大正十三年宮津線が舞鶴から丹後山田、更に峰山へと工事が進むにつれ、この鉄道の恩恵を受けない加悦谷の住民から丹後山田―加悦間を結ぶ鉄道新設の要望が高まった。

宮津線のつく前、与謝郡の旧山田、市場村を中心に丹後山田―四辻―岩屋峠を経て出石に至る鉄道建設運動が強力に行われたが実現しなかった。

宮津線開通以前は加悦谷で織られた丹後ちりめんは大八車に積んで人力で宮津まで運ばれ、船で敦賀や舞鶴を経て京都の問屋へ送られた。ちりめん産業の振興と共に、加悦―丹後山田間の鉄道敷設の要望が高まり、大正十四年加悦鉄道会社が創立された。社長には津原武、その他細井直義、杉本米治、市田力蔵、西原雄助、坂根誠一郎、下村五郎助など加悦谷指折りのちりめん商、糸問屋の諸氏が名を連ねた。そして翌大正十五年加悦鉄道はめでたく開通した。

しかし昭和十二年日華事変が始まり、昭和十五年奢侈品等製造販売規制が厳しくなり、ちりめん産業は大打撃を受けた。戦時下、軍の要請で大江山のニッケル鉱山が開かれると、昭和十

四年からは鉱土の輸送に活躍した。そして翌年岩滝に大江山ニッケル鉱業所の建設が始まった。最盛期には一日七十両の貨車が動き、二千人がこの事業に従事していた。

昭和二十年の敗戦で大江山鉱山、ニッケル鉱業所は同時に閉鎖され、戦後の自動車の発達と共に加悦鉄道は衰退、昭和六十年四月廃線となった。

現在加悦SL広場に保存されているイギリス・スチーブンソン社製2号蒸気機関車は平成十七年重要文化財に指定された。

⑧北近畿タンゴ鉄道

宮福線先の宮津線のところで述べたように、明治二十五年当時の宮津―福知山路線の実現は西舞鶴―豊岡間路線の完成で立ち消えとなっていた。しかし地元住民の懸命の運動により、昭和五十年河守―福知山間が建設予定に追加編入され、宮福線として工事が進められることになった。ところが昭和五十五年十二月日本国有鉄道経営再建促進特別措置法が公布施行され、この計画も凍結となった。

府北部四市十三町で組織する「宮福線建設促進期成同盟会」では、なんとか沿線住民の根強い要望実現のために、京都府と共に調査研究を重ね、第三セクター方式による運営を決定し、昭和五十七年京都府知事を社長とする「宮福鉄道株式会社」が設立された。そして昭和五十八年一月工事を再開、昭和六十三年七月十六日全長三〇、四キロの北近畿タンゴ鉄道宮福線が開通した。

その後、平成四年には特急車両「タンゴ・エクスプローラー」が運行開始。平成五年には、園部―天橋立間の電化・高速化工事が始まり、平成八年春のダイヤ改正から天橋立―京都間は電化された。これまで二時間十分であった所要時間が一時間四十分に短縮され、京阪神からの観光客誘致などに大いに役立っている。

以上でこの記事は終わるが、二年前の（その一）と共に改めて読み返してみると、今はその存続が危ぶまれているこの地方の鉄道が、多くの先人の非常な努力と、幾多の紆余曲折を経て今日に至ったことを痛感する。如何に有能な学者でも、先の時代の変化を正確に予想することは不可能である。地域の将来は地域住民自身で衆知を集めて討議決断すべきと考える。

参考文献
昭和三十四年読売新聞特別読物「由良川」
北近畿タンゴ鉄道十年のあゆみ
鉄道ファン二〇〇二、七
大江町新市移行記念誌大江伝（二〇〇六、一、一六）

経ケ岬から潮岬まで（No.7）

四方俊一

夜明けとともに起床して五月三日、午前六時、朝食を済ませて出発した。早朝は空気が冷たく気分が良い。

「橿原」の地名は「畝傍山」東南部の古代地名。「古事記」神武天皇の段に「畝傍の白檮原（うねびのかしはら）」、「日本書記」神武記に「畝傍山の東南橿原」とあるように橿原は畝傍山付近に立地することが推知される。（橿原遺跡からは白檮（切り株）の樹根が検出されている）、古代に大和朝廷がこの地方に勃興し、初期の帝都が数世紀にわたって奈良盆地、とくに東南部に存在したことである。

大和朝廷自身の記録である「古事記」「日本書紀」によれば、その始祖神武天皇は西方九州から東へ進み、生駒山地を西から大和へ進入しようとして、土着の

豪族登美の長髓彦に妨げられ、針路を変えて南方熊野地方に上陸し、吉野山地を水進して宇陀に入り、西進して橿原に至り、即位したと云う。これらのことは歴史学的というより神話として伝承されている。以後奈良盆地南部の葛城、磯城、飛鳥等に四世紀か八世紀初め迄（一時難波、山城、近江など）に都があった。つまり、和銅三年（七一〇）に大和三山にあった藤原京から奈良盆地北部に平城京を築いて移るまでである。

その後、延暦三年（七八四）に山城の長岡京へ遷都するまで、一時山城の恭仁、摂津の難波、近江へ遷都もあるが、平城京には天平文化の花が咲いた。「橿原神宮」畝傍山の南東麓に本殿、内拝殿、外拝殿をはじめとする素木造りの簡素にして雄大な社殿が白砂に映えて立ち厳粛な気配が漂っている。この地に第一代天皇である神武天皇が橿原宮を造営し、辛酉年正月に即位したと云う日本書紀の記事によって創建されたもので、明治二二年（一八八九）京都御所の賢所を本殿とし、神嘉殿を神楽殿として移した。昭和十五年（一九四〇）、神武天皇即位二六〇〇年の記念事業が行われて整備された。

朝の交通量の少ない時に足取り軽やかに歩くのは気持ちが良い。国道一六九号線（中街道）を快適に南下した。明日香村の猿石・高松塚古墳を左手に見て「高取町」に入る。大和盆地の最南端東部に有り、高取城の城下町である。

高取城は南北朝時代に始まったと伝えられているが天文元年（一五三二）奈良に越きた一向一揆は、社寺の破壊に猛威をふるい、この時、奈良を追われた興福寺の僧兵が逃れてきた。そして一向一揆との間で激しい戦いが行われたが筒井軍の援軍に助けられた程、堅城を誇った城であった。そして関ヶ原の役以降、本多因幡守が高取藩を興し、植村家政が寛永十七年（一六四〇）に入部して以降文久三年（一八六三）迄十四代にわたって継承した。

その城下町は大和から吉野に向かう街道筋として、壷坂寺参詣によって栄え、細長い町筋を形成している。今でも格子戸の古い家が続き、見事な長屋門の偉容を誇った家もある。明治以降は「大和売薬」の町として知られ、薬屋や薬りの行商に従事している人も多い。

長い芦原トンネルを抜けると「大淀町」である。吉野川の北岸に沿い、東西に開けた町で主産業は製材木工と果樹栽培で、特に二十世紀梨の栽培が盛んである。

今歩く国道一六九号線は「下ツ道」と云い近世の中街道にあたり、奈良盆地中央を南北に縦貫する重要な古代交通路である。

「大淀町土田」の交差点に達したのは午前九時、吉野川の北岸であった。左へ行けば「吉野町」、右折すれば大淀の中心街、その中心街の岡崎から吉野川に架かる橋を渡る。

「吉野川」本流は三重県との県境、年平均降雨量四五〇〇ミリと云う大台ヶ原山付近に発し曲流しつつ最北流し、吉野町大字国栖で高見川を合わせ、西へ向かって中流の同町上市付近から急に川幅を広げる。下市町の外れで山が迫るが五条市で開け

丹生川を合わせて和歌山県に入り紀ノ川と呼ばれる。

川は直線的に西流して和歌山市で紀伊水道に注ぐ。長さ一三六キロの一級河川。吉野地方は広大な山地に優良な杉・檜を産し、吉野川は近世中期以降、材木などの運搬に利用された。吉野町飯貝に貯木場があり、ここから筏で和歌山方面に送られていた。近代になっても木材輸送に利用されたが、昭和三〇年代にはすべて陸送となった。吉野川に架かる橋を渡るとそこは「下市町」吉野川を挟んで大淀町の対岸にあり、古くは市場町として栄えた。吉野杉の余材を利用した木箸造りが盛んで出荷量は全国一である。

又、三宝造りや菊、バラの栽培も盛んである。国道三〇九号線に別れて県道下市宗檜線に入る。ここから樺の木峠迄四キロの登り道が続く。周辺は柿の栽培が凄い。見渡す限り山また山が続くが樹木は柿の木ばかりである。若芽を吹いた柿、柿、柿、柿の木である。ところどころに人の影、恐らく柿木の消毒に来ているのであろうホースを伸ばしている。

峠に近づくにつれ道は険しくなる。峠の頂上付近迄農家が点在している。この辺りは山頂迄柿栽培で見事なものである。秋の穫り入れ時に来てみたいものだ。恐らく見渡す限り柿、柿、柿の実であろう。

峠に達したのは十二時近い時刻、一休みして昼食とする。峠からは「西吉野村」、唐戸、十日市、川岸と足を運ぶ、陰地の所に丹生川を挟んで温泉がある。

早速、温泉に浸り旅の疲れを癒す。「西吉野温泉：重曹食塩泉で創傷等に効果があるとされている。足のテーピングを外し伸び伸びと入浴する誰も客は無い。幸いにも昼間の温泉は客が無い。ゆっくりと寛いで身支度を整える。時刻は午後三時一〇分、天辻峠まで十六キロ、大塔大橋坂本で一夜の宿を取るため足を運ぶ。山また山の峠道を懸命に歩く。

峠に着いたのは七時、大塔橋の坂本まで一気に下る。右は和歌山県の山並み、左は天川村の山々。夜の山陰が続く。大塔橋を渡って空き地でテントを設営する。「大塔村」大峰山脈の西斜面にあり、北は西吉野村・天川村、東は上北山村、南は十津川村、西は野迫川村に接し、北西の一部は和歌山県に境する。西吉野村境に奥吉野と口吉野を境する天辻峠があり、天川村境に唐笠山（一一一八米）・滝山（一一四〇米）・天和山（一二八四米）・弥山（一八九五米）、十津川村境に下辻山（一三〇五米）がある。十津川の最上流天ノ川の流域にあり、左岸から舟ノ川、右岸から中原川・川原樋川が合流している。天ノ川に沿ってかつての西熊野街道（国道一六八号）が南北に通っている。明治二二年、舟川郷四ヶ村と十二村郷十四ヶ村が合併して大塔村が成立した。南朝の歴史にゆかりの深い所で、新村名も「大塔宮」にちなんでつけられたと云う。

朝五時に目覚める。薄明の中、出発準備をして明けとともに出発する。遠く十津川の谷が一望できる。この谷底を歩いて太平洋に出るのかと思うと身が引き締まる。

なる程右も左も山又山、遠く川下の方が霞んで見える。五月四日(月)猿谷ダムを右にして十津川街道を歩く。小さな大塔小学校の横を通り「閉君」・「宇井」と歩く。

「十津川」（新宮川）古くは、十津川郷は現野迫川村・大塔村・十津川村の地域、すなわち天辻峠以南の称で、東北部は天川郷に接続していた。元弘の乱直前に「大塔宮」が十津川入りして郷土戸野兵衛・竹原八郎らを頼み、正平四年（一三四九）に後村上天皇は十津川十二村宛の論旨を下賜している。

近世の十津川郷は、天正十五年（一五八七）の豊臣秀長による検地を経て年貢一千石を免許され、江戸時代には「トントン十津川ご赦免どころ年貢いらずの作りどり」とうたわれたところである。幕府は十津川を直轄地とし年貢赦免の特典を与える代償に夫役として材木運上を課した。夫役は北山郷全域にわたる御料林の木材運送（筏下し役）を請け負うた。慶長十九年（一六一四）大阪冬の陣に十津川四人衆らは奈良町奉行中坊秀政に従い戦功を立て、その軍功により郷士四五人が鑓役衆とされ、扶持米七八石余を給せられたのが十津川郷士の始まりである。

十津川郷は文久三年（一八六三）伝奏領となり、郷士らは禁裏警護を命ぜられた。また天誅組騒動には多くの郷士が参加した。明治四年（一八七一）には全村民士族に列せられた。当時の廃仏毀釈令（明治初年、新政府の神道国教化政策に基づいておこった仏教廃止運動）は多数の塔頭社・社僧を抱えた修験道の玉置山をまきこんだ。十津川郷民惣代は社内の仏像、仏具を焼き捨てて玉置神社の号を新紙官から許された。当時郷内には五一ヶ寺あったが明治四年一郷上げて仏祭を神葬祭に改めることを許され、翌五年には郷内総ての廃寺を請け負い認可された。以後十津川には寺が無くなった。

「十津川村」は全国一の広域村で奈良盆地の二倍以上の面積を持つが、人口密度は一平方キロ当り十・五五人と低い。

五月の連休故か観光客も増えて来た。谷瀬の吊橋の休憩所で村観光課、村観光協会、婦人会共催で歓迎会をしており地域特産物等を並べ接待していた。早速、酒と鮎の塩焼を買い求め、河原で一休みした。

高さ五四米、長さ二九七米の日本一長い鉄線の吊橋が架かっている。昭和二九年（一九五四）に架けられた生活用の吊り橋が、近年、日本最長という記録と共に、周囲の山々が織りなす眺望や、渡る際に味わえるスリル感などが話題を呼び観光名所なっている。

延元元年（一三三六）に後醍醐天皇は足利尊氏に追われて吉野山に一次待避したと云われ、後醍醐天皇の第三皇子、大塔宮護良親王は難を避けて暫く十津川郷に身を潜められた。この時、十津川郷民は、谷瀬に仮の御殿を建て、親王をお守りしたと云われています。その谷瀬から二キロ歩いた河津の国道下に第九八代長慶天皇（一三六八～一三八三）を葬ったとされる南帝陵が有る。そして川原近くに有る国王神社には長慶天皇をお祭りしてあり、「国王神社」の神額は大久保利通公の揮毫によると云われている。

国道を更に南下する。そこは「風屋貯水池」「風屋ダム」の有るところ。ここで遅い昼食を取る。風屋大橋から右手に大きなダムが見え、左手の谷に入れば奥地に日本の滝百選に選ばれた笹野滝・夫婦滝が有り、その辺一帯が「大和の水」であるが、歩いていくとなると一日掛かるので後日の課題とする。

風屋ダムを過ぎると野尻、岩村と歩き、小原の温泉地に着く。十津川本流の左岸に有る湯泉地温泉は十津川村では最も古く、五五〇余年の歴史を秘めた渓谷沿いの素朴な温泉地である。

（次号に続く）

平成17年度

人権標語

やさしさで
つながる広がる　みんなの輪
小学四年生

「いっしょだよ」
その一言で　笑顔がもどる
小学五年生

心と心のつながりは
やさしいえがおで　はじまるよ
小学六年生

編集後記

記録的な大雪に見舞われた今冬もまもなく終わりを告げようとしています。

今回もたくさんの寄稿がありましたが、由良地区の現状認識を深め、将来展望を開くため、智恵を出し合い行動していく必要があります。

成人式について、例年出席者氏名を掲載していましたが個人情報保護法等の関連から中止しました。

由良地区からも多数の出席者がありましたが心から祝福申しあげますと共に将来を担う社会人として責任ある行動を期待いたします。

平成17年度公民館行事もこの「公民館だより」一二六号の発行で予定どおり終了します。

地域の皆様の暖かいご支援と役員各位のご協力に対しお礼申し上げます。

（飯澤）

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています。